
IS あるオリ主の物語

tenoriushi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS あるオリ主の物語

【Nコード】

N6534Z

【作者名】

tenorishi

【あらすじ】

かつて篠ノ乃箒と出会っていたオリ主君が織斑一夏に続いてISを動かしてIS学園に入学というテンプレ展開の話。

本作は処女作・テンプレ・御都合主義・独自設定・独自解釈・作者の妄想青春などの要素が詰まっています。それらを考慮してお読みください。

第一話（前書き）

掲載されている皆様の作品を読ませて頂いて、投稿してみたくありませんでした。初めての投稿になりますが、よろしくお願ひします。この作品は独自の設定解釈があり、原作を読みながら書いているため、原作の文がそのまま使われている箇所があります。何か問題がある場合、すぐにご連絡ください。

批評・感想をお待ちしています。

第一話

「おお、まさか他にもイレギュラーが存在するとは」

「素晴らしい。これでわが国も」

「君にはいくつか選択肢があるが」

「君は今日から李明^{リメイ}だ」

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR始めますよー」

そう、目の前の女性の声で私の意識は焦点を現実に戻した。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

どうやら私は彼女の自己紹介を聞き逃していたらしいが、目の前の液晶画面には彼女がわがクラスの副担任であることと、彼女の名前が山田真耶であることが表示されていた。

なるほど、その低い身長と童顔が相まって同級生かと思っていたのだが、どうやら彼女は教員らしい。

このIS学園は、現代のあらゆる最先端とも言える場所なので施設は勿論、人材の方も優秀だと聞くので見た目と違って優秀なのだろう。

まあ、その優秀さが威厳には結びついていないのが何とも言えないが。

もしくは

「……………」

この妙な緊張感に包まれている教室の雰囲気^{雰囲気}に吞まれているだけか。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。ええっと、出席番号順でお願いします」

うるたえながらも職務を遂行する山田教員には申し訳ないが、自己

紹介の前にこの教室の緊張感をどうにかして欲しかった。

まあそれも仕方ないのだろう。

何故ならこの教室、いや、このIS学園に男という例外が生徒として存在しているのだから。

この世界に10年前、突如として出現した白騎士と呼ばれるISインフィニット・ストラトス。

それは現代科学の結晶足る各国の軍隊や兵器をあっという間に駆逐し、世界にその存在を認知させた超技術オーバーテクノロジーを用いて作られた、正に現代最強の超兵器。

世界は驚愕した。それは下手な小国程度なら為す術もなく勝てるほどの戦力で当たってもIS一機に勝てないこともそうだったし、何より使われている技術が全くもって理解出来ないこともそれに拍車をかけた。

いや、理解は出来るがそれはSFの中だけの話だったものが現実に現れたからこそその衝撃だ。

当時は神が人間を裁くために使わした天使説やら宇宙人の侵略説、はたまた白騎士が最初に出現した日本の世界征服説等で随分騒がれたらしいが、その騒ぎは最終的にISを作ったと言われる篠ノ乃束博士の声明により収束し、その後爆発した。

その声明を要約すると『IS、特に白騎士は現代兵器を遙かに凌駕する究極の機動兵器』 『ISに敵うのはISのみ』 『ISの根幹たるISコアの取り扱いには日本政府に一任する』といったものだった。世界はISの登場に熱狂し、ISの技術を得ることに熱中した。

そして篠ノ乃束博士によってISコアの取り扱いを一任された日本に全世界が情報の開示とISコアの提供を迫り、日本は屈した。

そうしてISコアを手に入れた世界は、ますますISに熱狂し人類の新時代の到来を期待した。それが唯の夢想だと知りもしないで…。

「…くん。織斑一夏くんっ。」

「は、はいっ！！」

いきなりの大声で驚いてしまった。

このねつとりとした視線の数々と緊張感のなか大声を出せるとは、彼は大物なのかもしれない。いや、きつと大物だろう。

なにせ彼は世界で初めてISを起動させた男なのだから。

そう、『男』。ISにはとんでもない欠陥があり、それが男性にはISを動かすことが出来ないということだった。

それが生みの親の篠ノ乃東博士の意図したことなのかどうかは、日本政府にISコアを渡した後に失踪してしまった博士以外には誰にも分らなかった。

だがISの研究が始まって10年。どんな研究がされたかは知らないが様々な、非人道的な研究さえされているだろうに、誰ひとり『男』がISを動かすなどということは無かった。

しかし、『男』がISを動かせなくとも『女』には動かせるのだ。世界はそんな欠陥など知らぬとばかりにIS研究を進めて行った。

その一環でIS保有国はIS操縦者を保護する政策を次々に施行し、それは将来のIS操縦者になるかも知れない子供にまで及んで行った。

それは一応男女平等を謳っていた世界がIS操縦者優位へ、そこから段々と女性優位な世界へと変貌していく歴史の転換期だったのだろう。

そう、織斑^彼一夏というイレギュラーが現れるまで、だ。

世界は再び熱狂した。織斑一夏というイレギュラーが現れたのならば他の『男』のイレギュラーがいるのかもしれない。そうなれば女性優位の世界からせめてIS操縦者優位の世界へ戻せるかもしれない。

い。そして今も尚解析できないISコアの解析の足掛かりになるのかもしれない。そんな期待をもって世界は次なるイレギュラー探しに熱中した。

そんな世界を変えてしまおう存在なのだ、彼は。

「ごめんね？自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

「いや、あの、自己紹介ぐらいしますから、落ち着いてください」

「本当ですね？約束ですからね？絶対ですよ！」

「はい、じゃあ……えー…えっと、織斑一夏です。よろしく願います」

「……」

彼は何を言ってくれるのだろうか？大物らしい発言をするのだろうか？

ちらちらと視線を彷徨わせているが、きつと言いたいことを頭の中で整理しているのだろう。

「……」

息を吸って、吐いたのが私の位置からでも確認出来た。言うべき言葉を決めたのだろう。

「以上です！」

「……」

がたたたつ、と身を乗り出していた女子数名が音を立てたが私も気持は一緒だ。

そう…だな。織斑一夏とはこういう男だったな。気を張っていた私がかバカみたいだ。

そうして、一瞬気を抜いたのが悪かったのか相手が気配を消すのが上手かったのか知らないが、いつの間にか新たな女性が現れていた。パアアンっ！と織斑一夏の頭で音を鳴らしながら登場したのは、すらりとした長身、スーツの上からでも分かる均整のとれた身体、野生の狼のような鋭い眼をした女性だった。

「いつ…、げえつ。関羽!？」

「誰が三国志の英雄か、バカ者」

まるで精悍な狼の群れに君臨する女王のような、そんな風格を漂わせた女性は、織斑一夏に注意を与えたと思ったら、その彼とコントを始めた。

いや、織斑一夏が一人でやっているだけなのだが……。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

成る程。彼女はわがクラスの担任様で

「キヤー。千冬様、本物の千冬様よ!」「ずっとファンでした」

私、御姉様の為なら死ねます!」

クラスの人達の憧れの人ということか。そして

「で? 挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

パアンっ!

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

織斑一夏の姉か。確かに昔見た時の雰囲気がある。

だけど昔より多少硬い感じがするな。以前見た時は今ほど硬くは無かったが尖っていた印象だったのだが…… 仕事中だからか?

「そうだ、他の者も気になってしょうがないみたいだし、この雰囲気をついでだ。李、お前も挨拶をしておけ」

「えっ? あっはい。えー、初めまして。中国出身の李明リメイです。一応『世界で二番目にISを動かした男』になります。ISについては素人もいいところですので、先生方を始め皆さんにはご迷惑をお掛けするかと思いますがよろしくお願ひします」

「えっ、二人目なんて報道されてなかったはずだけど……」「やっ

ぱり、男もIS使えるようになったのかな?」「えー、それはないんじゃない?」

「顔は…まあ普通ね」「そう?あの鋭い目つきとか……」

やはり、騒がれるものなのだ。それに、本人の前で批評されると…ここは笑うしかないだろう。

「あー、私が報道されなかった理由は中国政府が色々やったみたいで…一応、織斑一夏君のIS適性発見から2週間後に私のIS適性が発見されて、今頃私のことも報道されているんじゃないかと」と私の自己紹介中にチャイムが鳴ってしまった。

「と、そこまでだ。SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染み込ませろ。いいか。いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

「はい!」「」

「あー……」

1時間目のIS基礎理論が終わった休み時間。

隣の席の織斑一夏が机に突っ伏して唸っている。恐らく私と同じ心境なのだろう。

廊下にまでびっしりと並んで私たちを見学している生徒たち。何かの見世物にでもなったと錯覚しそうになるこの視線にはうんざりする。

その視線はクラスメイトも同じよう誰ひとり私たちに話しかけようとしない。正確に言えば、話したくても何を話せばいいか判らない、か。

それは、私も恐らく隣の織斑一夏も同じだ。

どうして私はここに来てしまったのだろうか。あのまま世界に公表されずに国内の研究所に引き籠もる選択肢もあったのに私は。

「えっと、お互い慣れない環境だろうけど頑張ろうぜ。えっと李？李明？」

「あ？ああ。私のことは李^リでいいよ。君のことは国の報道で知ってるよ。織斑一夏君」

「ああ、俺のことは一夏でいいぜ。フルネームで呼ばれると変な感じがするしさ。にしてもそっちでもテレビに出てるのか、俺」

「了解、一夏。それと一夏のこととは世界中に流れてると思うよ？なんていっても『世界初の男のIS操縦者』なんだから。私はせめて自分のいない所で報道してくれて、わがままをいって今日の報道にしてもらったのだけだね」

「俺もそうしてもらえば良かったかも。毎日テレビの取材だとか、どこかの研究所だとかが来て大変だったんだよ」

「私の方は殆ど研究所で缶詰だったから、その辺はお互い様だと思うのだけど」

「隣の芝生は青いつてやつなのかな、そういえば李^リって昔俺と
「ちよつといいか？」

その瞬間、心臓がドクンツ！と脈打ったのが判った。今まで考えない様にしていたものが一気に血流と一緒に脳に溢れだした。

昔の、世界が輝いて見えていた頃の、胸の痛みと共にある喜びの記憶、私の罪と後悔と歓喜の記憶。そして、その後の色を失った世界での私の懺悔と悔恨の記憶。

もしかして いや、それは無いはず でも、彼女だったら
「……………」

そう、篠ノ乃箒。一目見て分かった。

今では私より少し小さく見えるが、しっかりと立つその姿勢の良さ
と日の光に照らされてきらきらと輝いている彼女の黒髪とつり目が
ちの瞳が相まって、どこか凜とした抜き身の刃を未だに私に連想させる。

その刃は空っぽの世界で生きていた幼い私に、純粹に美しいと思わせた。

それは今でも変わらずにそう見える。

6、いや7年ぶりか？

幼いころの記憶よりも随分と綺麗になった。それに相変わらず髪型はポニーテールで良く似合っている。

彼女はきつと覚えていないだろう。いや、覚えていない方がいい。だが、私は忘れなかった、否、忘れられなかった。

その彼女が此処にいて、私たちに声を掛ける？

やはり、覚えているのか？気づいてくれたのか？

「……………」

頼む、何か言ってくれ。耐えられない。何処かに走り出したくなる。落ち着かない。

「すまん、織斑を借りて行く。廊下でいいか？」

前半は私に、後半は一夏にだろう。

「ああ、大丈夫だ。一夏の知り合いか？積もる話もありそうだし、次の授業に遅れないようにな」

「お、おう。じゃあ李、また話そうぜ」

「早くしろ」

一夏に用事……………か。

そうだよな、篠ノ乃さんは昔から織斑のことが。

やめよう。こんなことを考えてもどうしようもない。だけど、篠ノ乃箒と織斑一夏か。ここでその二人に合うとは…いや、二人の特殊性を考えればこれは必然だったのか。

むしろ私の方が……………異物、か。

一人はISの生みの親の妹、もう一人はかのブリュンヒルデの弟。

そして篠ノ乃博士と織斑千冬は親交があったと聞く。

そして、現在のISコア研究者の一部は篠ノ乃博士がISコアを自

由に操れるのではないか、『男』にISを起動させることも彼女ならば可能ではないかと噂している。

ならば、博士と親交のあった織斑千冬の弟（それも博士と織斑一夏自体もかなり親しい）にISを使わせようと細工をしても不思議ではないとの噂も出てくるのは時間の問題だった。

篠ノ乃博士の社会性皆無な人間性はそれなりに流布しているので、この噂はそれなりの信憑性をもって語られている。

それによって、天然の『男性初のIS操縦者』は李明なのではないかという私個人にとっては非常に傍迷惑な状況なのだ。

だが、中国政府と日本政府だけは知っているはずなのだ。私が以前。

いや、あれは関係ないはずだ。そもそもあんなことで

だめだ、結局どうしようもないことを考えている。

こういう時は誰かと喋っていた方が気が紛れる。適当に誰か捕まえて喋らせてもらおう。

「ちよつとよろしくて？」

彼女の声が、話が聴こえた瞬間、私はちよつどいいとばかりに振り向いた。

「えつと、確かセシリア・オルコットさん…でしたよね？イギリス代表候補生で…そうそう、入試主席だとも。オルコットさんの自己紹介は良く覚えてるよ。欧州人の自己紹介は判りやすくいいね」

「あら？私のことを知ってらっしゃるなんて、なかなか出来た方の方ですよわね。そう、私が入試主席のセシリア・オルコットですよ。それで、そのオルコットさんは見世物状態の私を助けに来てくれたのかな？だとしたらありがたいんだけど」

「いえ、純粹に挨拶をと思ひまして。それにあなたのようなISについて素人の方は大変だろうと、何か解らないことがあれば教えてさしあげようかと思ひまして。私、入試で唯一教官を倒したエリー

トですから」

「それはすごい。私は起動出来ただけで合格だと言われたからね。それと、教師役の件は是非お願いしたいな。国の代表候補生に教えてもらったんだけど、その教官役の人は天才肌の人らしくて分かり辛い部分もあつたんだ」

「ええ、よろしくてよ。まあ、私もそれなりに忙しい身ですから暇な時にでも教えてあげますわ。下々の庶民にも施しを与えるのも貴族の務めですから」

「庶民とは、またひどい」

彼女のものに言い苦笑してしまう。彼女は代表候補生、一部のISに触れもしない女性が謳う、ISを前提とした女尊男卑とは違う。彼女自身の努力に裏打ちされた自負がそうさせるのだろう。

「けど、オルコットさんに教えられるのなら相応に頑張らなきゃね。ISに乗れるだけの男つてだけじゃ、オルコットさんに教えてもらう価値も無いだろうし」

「ええ、そのとおりですわ。エリートの私に教えてもらおうというのは、それ相応の気概を見せてもらいたいものですわ。それでは他の方への挨拶がありますので失礼しますわ」

「ああ、色々ありがとう。オルコットさん」

そう言つてオルコットさんは去つて行つたが……。

オルコットさんには『頑張る』と言つたものの、どうしようか？

この学園に来たのだからって自身の中に理由があつたわけでもないし、周りに流されるように来ただけだ。

だからこの学園を卒業した後はそのまま何処かの研究所で過ごす生を漠然と思い描いていた。ここでいくら『頑張ろう』とも未来は変わらない。だったら別に『頑張る』ことはなくてもいいんじゃないか？

まあ、いいか。適当にやろう。差し当たっては。

「ちよつといいかな？」

「へっ！？私？何？何か用かな？」

「いや、ちよつと落ち着いて」

隣で私とオルコットさんの話を聞いていたであろう生徒に話をしようと思つたのだが、慌てさせてしまったらしい。

「う、うん。それで、どうかしたの？李：明君？」

「一夏にも言ったけど、李でお願い、上田さん。それで、一応さっきの授業も何とかついていける程度だったんだけど、他の人はどうなんだろうと思つてさ。実際ISの勉強も一カ月もしてなかったしね」

「あー、李君とか織斑君はそうだろうね。私は一般で入ったからISの操縦関係はまだただけど、さっきの授業ぐらいなら復習つてところかな。でも私が習つたものより詳しくかつたけどね」

「もしかして、それつて此処にいる皆そうなの？」

「そうだと思うよ？ただ、IS学園に併設されてるIS研究所で新しく発見されたこととかも授業内容に反映されるらしいから知っている内容でも気が抜けないんだけどね」

「そうなんだ。ならせめて、皆に追いつかなきゃオルコットさんに教えてもらうことも出来ないね」

「確かに。でも、IS学園に入れただけでもよかつたじゃない。将来安泰だよ？それに私の友達は凄い頑張つてたのに落ちちやつて結局違う学校に入ったし」

「そうだね。私も折角この学園に来たんだ、その人の分まで頑張るよ。教えてくれてありがとう」

「うん、私にも解らないところとかあつたら聞いてね」

「ありがとう」

どうやら、私はこの学園でも底辺に位置する劣等生のようだ。それに関しては別に何とも思わない。彼女たちのように以前から努力した人と一カ月程度しか努力していない自身が同じだとは思つていなかったから。

だから、次の授業の開始を知らせるチャイムと共に一夏と篠ノ乃さんが戻ってくるのを目にしながら、私は精々やるべきことが増えた

としか思わなかった。
そう、努力したものと努力していないものは違うのだから。

重い。

研究者達のISコア解明への期待が、他の男性のIS操縦者になれるかもという期待が、周りの生徒の『男』がどれくらい出来るのかという値踏みの視線が、私がこの学園に来たせいでISへの望みを断たれたかもしれない見知らぬ誰かの人生が、ただひたすらに重かった。

私はそんな期待を背負うことが出来る人間じゃない。

ISを動かしただけの！周りに言われるがまま此処に！この学園に来ただけの、『男』というだけの価値しかないこの私に！過去に向き合うことも出来ず、現在を見据えることも出来ず、未来を夢見ること出来ない、そんな人間に期待しないでくれ！！背負わせないでくれ！！

二時間目の授業が終わり、私は叫び出したくなった。

此処じゃない何処かにいって、私を知る人がいない所に行って叫びたくなった。

何を叫びたいのかも解らないけど、そんな気分になった。

私は此処で何をするのだろう。何が出来るのだろう。ただISが動かせるだけの価値しか私にはないのに。

誰もいないであろうトイレに向かいながら思う。廊下にいる生徒たちの挨拶やら自己紹介をいなし掻き分けて想う。

先の授業時に一夏は参考書を『電話帳と間違えて捨てました』と言った。

信じられなかった。信じたくなかった。彼は何も思わないのだろうか。それとも知らないだけなのか。私たちの立場を、望んでも得られないその価値を、希少さを、期待を。

そしてその後の織斑先生の言葉。

『自分は望んで此処にいるわけではないとでも言いたそうだな』
『人間社会で生きること放棄するのなら、まずは人であることをやめるのだな』

その言葉は私自身にも突き刺さった。突き刺さり、私の心を切り裂き、血を吹きだたせ、粉々に砕いた。

私は何なのだろう。私は人なのか？それともISを動かす世界に二つしかないパーツなのか？

彼は、一夏はどう思っているのだろうか。私は、私たちは人なのか、パーツなのか。

人であるなら他人の期待を、努力を、人生を背負わなければならぬ、背負って歩み続けなければならない。パーツならば何も背負わず、何も考えず、何も想わず、言われるがまま、命令されていればいい。

私には解らない。答えが出せない。どちらが正解なのか判断出来ない。

それとも彼は、一夏はそんなことは関係ない、俺は俺だともいうのだろうか？

男子トイレの中で、私は答えの出ない問いをグルグルと考えている。綺麗な場所だ。トイレの中だというのに汚れ一つ落ちていない場所。壁や床は磨きあげられ清潔感を演出し、設備は最新式で、常に空調が効いて匂いもしない。

その綺麗な場所で私は鏡越しに私を見つめていると、するりと問いが出た。

「君は何？」

鏡の中の私は笑っていた。その顔がひどく醜く見えて、この綺麗な場所に似合わなくて、私らしいと想った。

第二話

「全く、男子が二人いるというだけで……」

三時間目の授業の時間に遅れそうなために先に山田君を向かわせた為、一人で教室に向かいつつため息が漏れる。

一夏の方は今になって政府が寮に入れると言うし、李の方は今日になつての男性発覚だ。

元々中国政府からは二人入学すると推薦の連絡があつたため、寮の部屋割は組んであつたのだがそれもペアとなつた。

一人は男性というイレギュラーで、もう一人はいつ来るか判らないためだ。

全く連絡ぐらいしつかりしろと怒鳴り倒したくなる。

さて、チャイムが鳴る頃に教室にはつきそうだが。

「李、何をしている。もう次の授業が始まる。さつさと教室に戻れ」

「はい。いえ、トイレに向かった時に他の生徒に……」

「ああ、なるほど。今日は見逃してやるから次からは気をつける」

「はい、ありがとうございます」

李明、か。一夏に続いて『発見』された二人目のイレギュラーで、『天然』のイレギュラーとも言われる生徒。

とはいっても、私からすれば一夏も李も他の生徒も皆等しくガキだ。そこに差別も区別もない。思うところはあがあるがな。

それにあのクソ研究者どもめつ！全く、人の弟を捕まえて『養殖』という研究者どもには思わず握りこぶしを作ってしまった。

一夏はお前からすれば格好の研究材料なんだろうが、その前に私の弟だということを出させなければならん。

ああ、いや。今は仕事だ。それに生徒に関係ないことで荒れているところを見せるわけにもいかん。

「それと、李。眉間にしわが寄っているが、何かあつたか？お前もこんな環境に突然放り込まれたんだ。馴染めないのは判るがな」

「いえ、そういうわけでは。それに眉間にしわが寄っているのは元々です、織斑先生」

「ふむ」

そう言われて改めて李を見てみる。

細身だが体幹がしっかりしているところをみるに、身体は鍛えているのだろう。中国出身だというが、顔は大陸系というより日本人に近い容貌。目付きは鋭いというより細目というところ。

顔の造形自体は整っているのだろうが、雰囲気はどこか薄い。なんというか覇気がない。まるで風景に溶け込もうとしているかのような印象。

ほぼ初対面だからか、これ以上は判らん。

「まあいいさ。慣れない環境ということもあるだろうしな。それと一つだけ言っておくが……ヒヨコにすらなれてない卵共の悩みを聞くのも私の仕事のうちだ。何かあったら遠慮なく言え」

「っ！……ありがとうございます。その時は是非」

これに反応するか。やはり何かあるのか。まあ自分で言いに来るまで悩むのもいいだろう。それもガキの特権だ。

「では教室へ急ぐぞ。それと私より遅れて入るうものなら二度と遅刻出来んようにするぞ」

「えっ？そこは一緒に行く場面じゃ……」

「くくくつ。何を言ってる。私は教師だぞ？遅刻を許すわけにもいかんだろう。ほら、急げ」

「分かりました、先に失礼します！」

「廊下は走るなよ」

……。

李の後を追いながら、あれで多少は気が紛れればいいと思う。

今年は弟の一夏に李明というイレギュラーが現れたが、今年の生徒共はどんな成長をするのだろうか。それが私の楽しみでもある。

「さて、私も仕事をしなければな」

チャイムの音を聞きながら教室へ入る。

「逃げないことね！よくって!？」

「あ、ああわかった」

……これで厄介事が無ければいい職場なのだな。はあ。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性を説明する」
この授業は私が担当するのだが、山田君も聴講するつもりらしい。
メモまで準備して熱心なことだ。

「ああ、その前に再来週行なわれるクラス対抗戦に出る代表者を決めなければならぬな」

つと、忘れるところだった。仕事に追われてミスをするとは情けない。しっかりとしなければ。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

とたんにざわつき始める生徒達。

「はいっ。織斑君を推薦します!」「私もそれが良いと思います!」
ほう、織斑か。どうせ、物珍しいからという理由だろうが推薦は推薦だ。それに私が言った通り大した差は無いのだから誰でも同じだにしても、あの馬鹿。あの何も考えずにいる顔はこのクラスにもう一人織斑がいるなどと抜けたことを考えているのだろう。先が思いやられる姿だ。

「あつ、じゃあ私は李君を推薦します!」「私も、私も」

まあ、この雰囲気なら当然だろう。

「では候補者は織斑一夏と李明と……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「つて、俺か!？」

さっきからそう言われてるだろうが、バカ者。それと立ち上がるな、

目の前に立たれると邪魔だ。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないのなら」

どうするか。織斑と李は他の生徒と比べ、明らかに素人だ。模擬戦をさせるわけにもいかんし、何か適当な選出方法は……。

「ん？なんだ、李。推薦か？」

「そうだよ、李からも何か言っただろうぜ俺らじゃ、クラス代表なんて」

「煩い。黙れ」

パン。

「痛っつ！」

ふんっ。私の指示に従わないからだ。

「李、言え」

「はい、私はオルコットさんを推薦します。入試主席だと聞きましてので適任かと思っただのですが」

ふむ、オルコットか。入試主席で、試験とはいえ教員を倒す實力もある。他の生徒よりも頭一つ抜けているのは事実だが、それだけで決めるのもな。

「その通りですわ！大体、李さんとはかくその無知な男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにその様な男の下という屈辱を一年間味わえと仰るのですか！？」

はあ、先の厄介事が早速か。自分が原因なら自分で処理しろよ。弟よ。

「実力からすれば私がクラス代表になるのが必然。よしんば、他の要素があったとしてもあのような物を知らない極東の猿にわたくしが負ける謂われはありませんわ。わたくしはこの学園に修練しに来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！！」
あー、山田君。そんなに慌てなくてもそのうち落ち着くところに落ち着くさ。だから私は知らん。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしであるのは主席ということからも明白ですわ！！」

「大体、あなたのような男が、織斑先生の弟というだけで」

「千冬姉は関係ないだろ！！大体、そういうお前だって、人のことをぐちぐち言える人間なのかよ！」

「なっ……！？」

織斑よ。口から出たものは戻せんぞ。まずいと思っているのならいいが。オルコットも言いすぎだとは思うがな。

李も自分の発言からこんな展開になって驚いて…いない？何か思いつめているようだが……。

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしを侮辱しますの！？いいですわ、決闘ですわ！！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますが」

教室の雰囲気はオルコットと織斑を中心として、他の者は見物している状態だ。

だがその中で李だけは先ほどから沈黙したままだ。

何を考えているか知らないが、今回のことを利用するか。李も少しは気分転換になるだろう。

「男が一度言ったことを覆せるか。ハンデはなくていい」

「えー？それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの？」

「つと、今は李のことだけ考えている訳にもいかないな。」

「織斑とオルコットは話がまとまったようだが……李、お前は どうする？」

「そこでようやく織斑とオルコットは李のことを思い出したのか、ハッとしていたが。」

「そう、ですね。辞退は？」

「他薦されたものに拒否権など無い、選ばれた以上覚悟しろ」

「なら、最初に私と一夏を戦わせてもらっていいですか？その勝者

がオルコットさんに挑戦という形で」

「ふむ、理由は聞かないがいいのだな？ ハンデは？」

「いいません」

「ならば勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。

李と織斑が初戦で、勝者がオルコットと対戦だ。各自用意をしておくように。それでは授業を始める」

パンツと手を叩いて空気を入れ替える。

これedyouやく授業を始められると安堵しながら私は授業を進めはじめた。

放課後、私は早速学園の訓練機を借りるために受付に向かった。

「すみません。この書類を見せれば訓練機が借りられると聞いたのですが合っていますか？」

「うん？ ああ、君が噂の男性IS操縦者か。『二人目』の方かい？」

「ええ、まあ」

「それなら、中国政府から話しは通っているよ。機体はどれにする？」

機体か。この選択で私の戦術も決まるから考えなくては。候補としては二つ。

まずは日本産の訓練機『打鉄』、安定した性能で、特に防御面に信頼性がある。近距離志向の機体。

次はフランス産の訓練機『ラファール・リヴアイヴ』、性能自体は打鉄よりも高いレベルでまとまっているが、汎用性重視のために器用貧乏に陥りやすい。全距離対応型の機体。

一週間後の模擬選では殆ど技術の向上などは期待出来ないだろうから、触れたことすらない銃器を軸にするのは無謀。それにどれだけ相手の攻撃を避けようと私の技量では被弾率が高い。

ならばダメージ覚悟で相手に近付いてのダメージを与える短期決戦

を望むのが精一杯か。

となると打鉄を選ぶのがいいか。

「では打鉄をお願いします」

「了解。あと、その機体は君の専用機が来るまで独占だから整備室に持って行くのもお願いね。あとその書類を持っていけばアーリーナの使用も優先されるらしいから」

「わかりました。ありがとうございます」

「あと、稼働データが欲しいからって、隣のIS研究所の黄さんの所に呼び出しがあったら行くように」

「了解です」

この書類にそんな意味があったとは。政府もどれだけ日本と学園に金を出したのか、私にそこまでISを使わせようとするとは恐れ入る。

だが、今となってはちょうどいい。

自分で言って、決まったことだ。せめて無様を見せない程度には『頑張ろう』。

「はあっはあっはあっ」

きつい。ISに乗るのがこんなにもきついとは思わなかった。

訓練機を受け取った後、比較的小型のアーリーナを借りて山田先生に教わりながら、ISを乗り回していたのだが二時間もしないうちに限界が来てしまった。

ISは脳とISコアを繋げて人間の脳だけでは判断しきれない高速の世界で思考を可能とさせる。

だが、思考自体は高速でも、そこからどう動くかは自分で判断して動かさなければならぬ。

そこで普段身に付いている無意識の動きがIS特有の動きを阻害させ、イメージ通りの動きが出来ないどころか危うく墜落するという

場面もあった。

それに無理な機動をすればISの生態補助機能が限界を迎え、怪我をする恐れもある。

いくらISお得意のシールドバリアや絶対防御があるとしても墜落の恐怖や自分が宙に浮いているのには慣れない。

こんな有様で来週の模擬戦で戦えるのだろうか？

「あつ、李君。先ほど織斑先生がいらっしやっって言伝を預かりましたよ」

「はあ、迷惑をかけてしまったようで」

「いえつ、迷惑だなんてそんな」

「それで、私にどういった用件で？」

「そうでした。李君の寮の部屋が決まったので、それをお知らせに」
「なるほど、態々ありがとうございます、それで部屋はどちらに？」

「一夏と同じ部屋ですか？」

「部屋の番号は1037号室になります、李君は一人部屋ですね。
荷物は既に部屋に入れてありますので」

「個室ですか？よく準備できましたね」

「ええ……日本政府は急に織斑君を入寮させるし、中国政府はぎりぎりまで李君の性別を隠すし……大変でした」

「それは……申し訳ありません」

「いえつ！李君が悪いわけじゃないですから。それと、大浴場は使えないので、部屋の備え付けのシャワーで我慢してください」

「わかりました」

「あと、そろそろ夕食の時間なので、今日はもう終わりにしましょう。遅れない様にしてくださいね」

「はい。それと質問なんですが、大丈夫ですか？」

「勿論大丈夫ですよ！それでどうしたんですか？」

「ISに乗っているとどうも違和感というか、普段と違うので戸惑ってしまって。何かコツみたいなものではありませんか？」

「うーん、そういうのはコツとかないんですよ。とにかく乗って

慣れるしかないと思います。特に訓練機などの量産型は操縦者がISに合わせなきゃいけないので……力になれなくてすみません」

「いえ、参考になりました。ありがとうございます」

「いえ、そう言ってくれると先生も嬉しいです」

「あつ、あと学園にあるIS戦の映像記録の貸し出しの許可をお願いしてもいいですか？」

「それぐらいでしたらお安いご用です。明日には許可が出ると思いますが放課後には借りられると思いますよ」

「ありがとうございます、山田先生。お世話をお掛けします」

「生徒の為に働くのが先生の務めですから。それでは、夕食に遅れないようにしてくださいね」

ふうっ。とりあえずはISを動かすことと授業についていくことしか出来ることは無いな。

一夏は今頃何をしているのだろうか。私のようにISに乗っているのだろうか。

ふと、アリーナの遮断シール越しに空を見上げた。

黒く染まり始めたソラに一番星と月が見えた。

美しく輝く円い月に、まるで寄り添うように一番星が輝いていた。

きつと篠ノ乃さんは彼の傍にいるのだろうか。一夏との関係が昔と変わらないのなら、きつと。

昔からそうだった。彼女と彼は二人で完結していて、私はそれを見ているだけだった。

彼に恋した人は星の数いれど、彼女ほど彼に近付いていた人はいなかった。

彼はあの月の光のように優しさを振りまいて、周りの人を虜にしていく。その月を独占しようと、近づこうとする人はいつしか手が届かないことを知って諦めて云った。

それでも彼女は手を伸ばしていたんだ。いつか月の、一夏の手が彼

女の手を掴んでくれるのを夢見て。
そうして、あの一番星のように宙へと上って行った。私の手の届かないソラへと。

まるで、月に魅せられて宙へ目指していった宇宙飛行士みたいに、皆が諦めたものを目指して上っていったんだ。

気づくと山田先生と別れてから一時間も灯りの付いていないアリーナに私はいた。

ISからは既に降りていて、ただ空を眺めていた。

「星がきれいだ」

満点の星に囲まれた円い月は今日も優しく私を照らしていた。

私は月に背を向けてISを片づけ、部屋に向かった。

誰もいない、ポストンバツク一つが置いてある部屋へ。

「夕食はもうないだろうな」

「悪かった、ホントにすまんっ！」

朝、空きっ腹を抱えて食堂に向かい、助かったとでも言いたげな表情の一夏に誘われるがまま同じテーブルに座るといきなり謝られた。

「いや、何を謝られてるのか判らないけど、頭を下げるのはやめてほしいんだけど」

何これ？なんでいきなりこんな羞恥プレイなの？趣味なの？一夏の趣味なの？

「いや…昨日のセシリアとの喧嘩に李も巻き込まってしまったからさ」
なんだ。趣味だったわけではないのね。安心したよ。

「いや、私の方こそオルコットさんを推薦したばかりに…昨日話した感じだとあんなに攻撃的な人じゃなかったはずなんだけど……」

「それは…なんというか…俺が悪い…のか？どうなんだ？箒…篠ノ

乃さん……」

「……」

「なあ、いい加減機嫌を直してくれよ」

ん？喧嘩でもしたのか？昨日はこんな感じじゃなかったはずだけど。篠ノ乃さんは普段の凜とした表情と違ってムツとした顔をして黙々と朝食を食べている。私たちの話に混ざることもしない。何かあったのか？

つと、その前に……。

「そういえば一夏と……篠ノ乃さんの関係は？昨日の感じだと知り合いないんでしょう？」

「ああ、そうなんだよ。箒とは幼馴染なんだ。家も近くて一緒の道場にも通ってたんだぜ」

「へー、通りで二人は親しいわけなんだ。これからは私ともよろしく、篠ノ乃さん」

知ってるよ。私はそれをずっと見ていたんだから。

そして、私が知っていることを態々聞かなければいけない現状への苛立ちと隠していることの罪悪感が弱冠沸いてくる。

にしても、幼馴染ね。あの頃と関係は変わっていないのか。

私は少し浮かれていた。

彼女と一緒にご飯を食べるという状況に。彼女と一緒に居れると言うこの幸運に。まだ彼らの関係が決定的でないことに。そして、彼女と真つ白な関係でまた始められることに。

「そうなんだよ。だから箒と同じへ」

「お、織斑君、李君。一緒にいいかなっ？」

「へ？」

「私は構わないよ」

「俺も別にいいぜ」

小さくガッツポーズをしながら、朝食のトレーを机に置いたのは私たちのクラスの三人だった。

「うわっ、二人とも朝からすっごい食べるんだね」「お、男の子だ

ねっ」

「俺は夜少なめ取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

「私は昨日の夕食を食べ損ねてね、今日は特別多いだけだよ」

一夏と三人の女子が楽しげに会話していく中、篠ノ乃さんは食べるペースを上げた。

「あの、篠ノ」

「……織斑、私は先に行くぞ」

「ん？ああ、また後でな」

彼女は私が話しかける前に去ってしまった。

彼女は私を覚えていない。

明^{あき}。

そう呼ばれることはもう二度とないのだろう。

彼女の中に少しでも私がいたという証を残そうと、それが例え傷だろうとも構わないと必死にもがいた記憶。

それは全て無駄だったのだなと、私はひどく冷めた頭で考えていた。

胸の奥がチクリとしたのを私は気付かないで一夏達と話をする。

「そういえば織斑君って、篠ノ乃さんと仲いいの？」

「お、同じ部屋だっけ聞いたけど……」

「ああ、まあ、幼馴染だし」

「は？」「……えっ？」「……」

「えっ？いや、なんで李まで驚いてるの？さっきいったろ？」

「いつ、いや。何でもない。というか一夏は個室じゃないのか！？」

「李のほうこそ誰かと相部屋じゃないのかよ！？俺だけ？」

「何で李君は個室？」「やっぱり、織斑君と篠ノ乃さんって付き合ってるのよ」「あー私織斑君狙いだっただのに」

「いや、中国の代表候補生がこの学園に来る予定なんだけど、その連絡が未だに無いらしい。だから今日来るかもしれないし来週かもしれないって状況だから、一人分部屋を開けておかなきゃいけないって聞いている」

彼女と一夏が同室だと聞いて動揺してしまったが、私は上手く隠せただろうか？

それに、何故彼女と一夏は同室なのだ？谷本さんが言った通り、彼らは付き合っているのか？幼馴染では、昔と同じ関係だったのではないのか？

「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

タイミング良く織斑先生の声が食堂に響き渡り、皆慌てて朝食の続きを食べ始めてしまった。

どうもこれ以上話せる雰囲気ではないので、私はモヤモヤした感情と疑問を朝食と一緒に飲み込んだ。

昼休み。

私は朝から続く憂鬱な気分のままだった。いや、さらにひどい。

先ほど一夏と篠ノ乃さんは手を繋いで一緒に昼ごはんを取りに行つたのを目撃したのが拍車をかけたのだ。

それを見た上田さん達は朝の話も知っているのだろう、喜々とした顔で話しかけてくる。

「ねえねえ、李君。やっぱり、あの二人付き合ってるよね！織斑君から何か聞いてない？」

「二人は幼馴染だとした私は聞いてないよ」

私にはそう答えるしかなかった。例え小さな希望でも残しておきたかったのだ。

「それはあれだよ。織斑君は噂されるのが嫌で隠しちゃって、ちゃ

んと言ってくれない彼氏に篠ノ乃さんは怒ってたんだよ！それで言葉で言えない織斑君は行動で示そうって！きゃー！そういう不器用な優しさっていいよね！二人で手繋いで一緒にご飯食べるんだよ！」

「私もそんな彼氏が欲しいな！」

「入学前から付き合ってたのかな？」

「やっぱりあの二人はそうなのかな？」

「絶対そうだよ！篠ノ乃さんもなんだかんだ言っても結局嫌がらずに着いていったし！」

やはりそうなのか。

私には夜空に浮かぶ月と星を見上げることしか出来ないのか。手を伸ばそうとも決して届かず、月を羨むことしか出来ないのか。

月面着陸時に月に降り立ったアームストロング船長を、月の周回軌道から眺めることしか出来なかったマイケル・コリンズのように。人類はニール・アームストロングこそが英雄だと持て囃した。

彼らに一体どれほどの差があったと言うのか。マイケル・コリンズは努力したはずだ。それこそアームストロング船長に負けないほどに。

なのに、一人は人類初の月面着陸成功の英雄で、一人は月の土さえ踏めずに英雄の陰に追いやられてしまった。

船長と彼は何が違った？

力も、知恵も、経験も、努力も、月への情熱も、何も違わないはずだ。

ただ船長という役職に選ばれたか選ばれなかったの違いしかなかったはずなのだ。

私と一夏は何が違う？

努力しなかった？頑張った、私は頑張ったさ！必死に彼女にアピールした。それでも駄目だった！

一緒の時間を過ごす長さ？私は彼女に話した！学校にいる間は出来

るだけ一緒に過ごした！それでも駄目だった！

力が無かった？彼らが剣術道場に通っていたように、私だって通っていたさ！一夏にだって負けない強さだった！それでも駄目だった！それでも彼女が好きになったのが一夏だった！彼女が見つめる先は何時だつて一夏だった！彼女が恋をしたのは一夏だった！選ばれたのは一夏だった！！

それでも好きだった。好きで好きで堪らなかった！！だから一夏が気づく前に、彼女の想いが届く前に私に振り向かせようとした！！それでも駄目だった！！

一夏が優しくすると彼女は笑った。一夏が他の子を優先すると彼女は悲しんで嫉妬した。一夏を見つけると彼女は私を置いて走って彼に向かった。

ぜんぶっ！全部私には見せなかつた彼女だ！！

私はマイケル・コリンズと同じだ。

必死に努力し、情熱を燃やし、目指した物の近くに行っただけ。最初から眺めることしかできず、選ばれたものを羨むだけだ。

私の初恋は終わったのだな。いや、始まっていない。何故なら最初から終わっていたのだから。

だからだろう。涙も出てこないし悲しくも無い。ただ、胸にぽっかりと穴が空いたようにしか感じられないのだから。

その穴は最初から空いていて、私が今まで気づかない様に、気にしない様に、慎重に蓋をしてあっただけの穴だ。

それに今更気付いただけだ。

「李さん、ちよつとよろしくて？お話があるのですが」

そうやって、私が落ち込みかけた時に話しかけたのはオルコットさんだ。

この人はタイミングが良いのか悪いのか。

私が沈んだ気分の時にばかり話しかけてくれる。

「えっ？あ、ああ。ならお昼を食べながらでもいいかな？上田さん達と一緒に」

「いえ、それなりに真剣な話ですので……来週の模擬戦のことで」「あつ、それなら私たちのことは気にしないでいいから！」

食堂につき、一夏と篠ノ乃さんが見えない席に座ってオルコットさんと話す。

今は彼らの姿を見たくなかったから。

時間をおいて、それから事実を認めて、おめでとくと祝福したかった。

「それで、話って？」

「ええ、昨日のことを謝ろうかと思いましたが。決闘自体に後悔はありませんが、李さんを巻き込んだのはわたくしの落ち度でしたわ」

「一夏にも言われたけど私は気にしてないよ。むしろいい機会だとさえ思っているから」

「いい機会、ですか？」

「そう、昨日オルコットさんが一夏に言った言葉はそのまま私にも当てはまると思ったんだ。だから、かな。昨日オルコットさんに言った教師役をお願いしなくなった。入試主席で代表候補生で専用気持ちのセシリア・オルコットに、ISを教えてもらいたくなった。

私に教える価値があると思わせたくなった。そのための、機会」

「ふふふつ、恥ずかしいですわ。あんな無様な、頭に血が上っていた時のわたくしの言葉でそう言われてしまったら……本当はわたくし、訓練機で戦う李さんにハンデでも差し上げようかと思ったのですが、やめておきますわ。ですが、待っておりますわ。李さんがわたくしに教える価値があると示す時を。ですから、織斑一夏などわたくしの分まで叩きのめして、わたくしの前に現れてみなさい」

「オルコットさんに認められるように精々努力させてもらおうよ」

「では、来週お待ちしておりますわ」

そう、今は来週勝つ事だけを考えよう。それ以外を考える余裕なんて私には無いのだから。私の価値を、私だけの価値を見つけるため

にも。

勝たなければならない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6534z/>

IS あるオリ主の物語

2011年12月23日05時57分発行